『廻国通道日記』について

栗林文夫

（一）

『廻国通道日記』（以下、「日記」と略称する）は、山伏として諸国の神社仏閣を廻り納経した堀之内日限坊の廻国日記である。[1] 文禄三年（一五九四）二月十一日に薩摩国を出発し、諸国を遍歴して同五年（同四年とする史料もある）七月二九日に菱刈羽月の在所に帰着している。およそ二年五ヶ月間にわたる日記である。

名称　日記の原本と思われるA本（個人蔵、黎明館保管）には外題・内題共に無く、A本を写したと思われるB本（個人蔵、黎明館保管）には「廻国通道日記」、更にその後の写本C本（島津家本、東京大学史料編纂所蔵）の外題には「堀之内良限坊巡国通道日記」、内題には「廻国通道日記」とある。ここでは、便宜上B本の「廻国通道日記」を本史料の名称としておく。

ところで、この日記は既に江戸時代末には知られており、諸書の編纂に利用されていた。例えば、上原尚賢『西藩烈士干城録』[2]には「引書」として「堀内日限坊廻国日記」が、福崎正澄『本藩人物誌』[3]の「引用書目」にも「堀之内日限坊廻国日記」、伊地知季安の『旧記題苑』[4]にも「堀内日限坊廻国日記」等と見える。

廻国の動機・人数・期間　廻国の動機は、日記本文末に「右意趣者先君御菩提、前之又一郎様御法名一唯如参大禅定門御タメナリ」とあることから、文禄二年九月八日巨細島で死去した主君島津久保[5]の菩提を弔うためであったことがわかる。

廻国した集団の全容は明らかにしがたいが、日記に同行者として名が登場するのは、平山一忠坊・参友坊・信秀坊・真蔵房等である。復路で大坂を発った後、手分けをして四国へ四人、中国へ二人、人数は不明であるが淡路国に渡ったグループもあったようであるので、この時少なくとも七人以上で廻国していたことが推測される。[6]

また、『平山家系図（抜粋）』[7]の忠続（一忠坊）の項には「催同行十二人」とある。これによって、一忠坊の他に十二人の同行者があったことがわかり、この系図による限り、少なくとも合計十三人以上で廻国したことになる。日記には、諸所で手分けをして廻国した記述があることから、二年五ヶ月という短期間で成就することが可能であったのであろう。

しかし、日記の本文を順に読んでいくと、菱刈羽月に帰着したのは文禄四年七月二九日としか読めない。そうすると更に短い一年五ヶ月間で廻国を遂げたことになる。史料によって、帰着の年を文禄四年とするもの、同五年とするものがある。

・文禄四年…『西藩烈士干城録』・『薩藩名勝志』・『平山家系図（抜粋）』・「平山忠高願書」[8]

・文禄五年…『本藩人物誌』（但し、異本として文禄四年説も紹介している）・「堀之内日限坊以来記録」[9]

やはりこれは、日記の書き方に問題があり、成就した年として素直に

奥付を読めば文禄五年と解せる。また、日記の本文を正確に読むと、文禄四年に帰国し一年かけて成就した（この日記を書き上げた）とも理解することが可能である。[10]

日記の文章は、日付・宿泊地・奉納先の寺社名・距離等を基本として、他にその土地の名所・旧跡、印象に残った出来事等が簡潔な文体で記される。これは恐らく道中で毎日記された日記ではなく、メモしていた事項を帰国後、日記の体裁に仕上げたからと思われる。そうすると、実際に帰着したのは、文禄四年七月二九日で、それから二年余りかけてこの日記が完成したということになる。[11]

堀之内日限坊　堀之内氏は「伊集院堀之内継図」[12]によれば、島津氏二代忠時に始まり、以後、忠経―俊忠―久兼へと続く。久兼は伊集院弥五郎と号し、彼以後は伊集院氏を名乗る。その後、久親―忠親―忠国―久氏―頼久―孝久―久国―忠安―忠晴―忠利へと続き、忠利が初めて堀之内長門守と号している。以後、久信―久高―久歳―久規と続き、この久規が日記の記主堀之内日限坊その人である。

また前掲「堀之内日限坊以来記録」によれば、俗名を民部左衛門と言い、御意により山伏となり日限坊と名乗った。院号は頼専院、当山派の山伏であった。島津久保の菩提のために日本廻国を仰せ付けられ、御経を奉納して三年で成就した。日帳がある（日記を指す）。供養塚を小苗代原に建立した。高十七石を下された。廻国に同行したのは踊の平山一忠坊である。帰国後、大口城本丸に召し置かれ、今「日限城」と申し伝えている。西原八幡宮へも日参していたところ、諸所一同に下城を仰せ付けられ、西原八幡宮鳥居の近くへ大宮司屋敷と田畑を下された。更に西原八幡宮大宮司も仰せ付けられた。以後、子孫は代々山伏となり、西原八幡宮大宮司を勤めた。他に、『西藩烈士干城録』。『本藩人物誌』も日限坊の事を記すが、ほぼ同内容の記述である。

猶、系図には、慶長十八年（一六一三）に田禄二六斛二斗一升を有し、邑士の籍に日限坊が入っている事が記されている。

平山一忠坊　日限坊の同行者の一人平山一忠坊は、俗名を源六、作右衛門、忠続といった。前掲平山忠高願書によれば、平山家は島津忠国の三番目の弟季久の二男忠康に始まるという。忠康の後、近久―久丘―忠智―久武と続くが、いずれも戦死を遂げ、久武の後が途絶えてしまった。そこで、久丘の妹の子忠続が血筋の者として跡を取った。忠続は島津久保に召し使われ、天正十八年（一五九〇）二月、相模国小田原の陣にも騎馬で参加し、供の人数十五騎の内に入っていた。文禄の役では久保に供をして渡海した。文禄二年（一五九三）九月八日、唐島（巨済島）にて久保が卒去すると、死骸を供奉して、十月八日帰朝した。

葬礼が終わった後、久保の菩提のために山伏となり、一忠坊と改名し、同三年二月薩摩国を出発して、六〇余州を廻国。一国に三部の経を奉納し、同四年所願を成就して帰国した。供養の塔婆を大口小苗代に築いた。廻国の際、首に懸けていた位牌や厨子を自らが所持するのは不似合いであるので、加治木の春日寺へ奉納し、尊霊のために自分の高のうち一石を寄附した。位牌は後に踊の東光寺へ遷した。その後、島津義弘の供をして慶長五年（一六〇〇）九月十五日関ヶ原の合戦において戦死した。

『本藩人物誌』・『平山家系図（抜粋）』にも平山一忠坊の事が見えるが、ほぼ同内容である。

供養塚　廻国を成し遂げた日限坊等は、大口薬師堂午未方角三町ばかりの、馬越往還の路傍の小苗代原に島津久保の供養塚を営んだ。[13]『平山

家系図（抜粋）』には、「請テ大守使牛屎菱刈両院真幸院人夫築十間四方塚、建三十三尋之塔婆、国中貴賤無不嘆美其功徳也」と、島津氏に請うて地元の人夫を使役して造営したこと、塚の大きさが十間四方、三十三尋の塔婆[14]を建てたこと等が記されている。そして「于今其験御座候キ[15]」と言われていた。

（二）

次に日記本文の内容から注目すべき点について、幾つか触れておきたい。

距離の表記　本文中には距離を表す言葉として「歩」と「里」が使用されている。『日本国語大辞典』によれば、「歩[ポ]」とは「土地の長さの単位。曲尺六尺（約一・八[メートル]）に等しい[16]」とあり、音が同じである「分[ブ]」の場合、「長さの単位。寸の十分の一。厘の一〇倍の長さ。曲尺で約〇・三センチ[メートル][17]」とある。また「里」については、時代や地域によって様々な使用例があるようであるが、「三六町（約三・九キロ[メートル]）を一里と」し、「東国では六町一里が、上方・西国では三六町一里が用いられた」とある[18]。

「里」に関しては、本文を読み進めていくと、右の数字がおおよそ妥当なものと思われるが、「歩」については右の理解では齟齬を来す。

また日記全体を通してみると、前半部分で「歩」を、途中「歩」と「里」が混在して使用され、後半部分で専ら「里」を使用することが多いようである。猶、B本はA本を写しているので、両者同じであるはずであるが、越前国今城から越中国森山までの間で九箇所、A本の「里」を「歩」と書いている。

ところで、「歩」と「里」が使用されている箇所を詳しく見てみると、例えば、「永浜へ付一夜、是ハ五歩也、それより木之本ニ付一夜、是も五里也」とあるように、本来「歩」と書くべき所を「里」と書いてしまっている箇所がある。反対に「それよりあか坂ニ夜、是ハ六里也、それより岡崎ニ付一夜、是も六歩也」という箇所もある。単なる書き誤りなのか、それとも何らかの意図があってのことなのか、これだけでは判然としない。

また往路で肥後国の佐敷から日奈久まで海路を利用して「六歩」であったと記しているが、復路では日奈久から佐敷まで「五里」であったとある。ここでは海路を取ったことが書かれていないので、恐らく陸路であったと思われる[19]。地図上で佐敷と日奈久の位置を確認すると、海路を取った方が陸路より若干距離が長くなりそうである。そう考えると、佐敷・日奈久間の距離表記が海路と陸路の違いはあるが、「六歩」と「五里」のように二通り見えるのは、実は「歩」と「里」を同じ意味で使用していたからではないかという推測が成り立つ。

そこで、試みに「歩」と表記されている場合の距離を地図上で求めてみると、一歩がおおよそ三～四キロ[メートル]前後であることがわかる[20]ので、ここで使用されている「歩」という距離の単位は、「里」と殆ど同じ意味で使用されていることが判明する。

既に見たように、本来「歩」と書くべき所に「里」と書いたり、その反対があったりしたのは、どちらも同じ意味で使用しているから、記主としてはいずれでも良かったからということになる。「歩」を「里」と同じ意味で使用することが、当時どれほどあったのか、日限坊独特の使用方法なのか。現時点では判然としないが、今後の事例収集が望まれる。

猶この他にも、日限坊独特の表現、表記、思い違いによる誤記等がしばしば見受けられる。読み進める上で注意が必要である。

廻国のルート　日限坊等が廻国したルートを日記本文によりながら、概略的に書き上げると次のようになる（表記は本文通り。国名の後の括弧は、訪れた寺社や地名等）。

薩摩国（菱苅山野）→肥後国（湯浦・佐敷・日奈久・八代関・尾河の宿・湯出迟迦院・宇登河尻・隈本・藤崎八幡宮・山か宿）→筑後国（はひ塚の宿・高良山）→肥前国（久留女・千栗久山）→筑前国（岩屋湯本・宰府天神宮・羽形・あかま・あし屋）→豊前国（とはた・小倉・菊ノ郡曽祢・あをやき・中津・五百羅漢寺・小倉・関の戸）

…薩摩国を出発し、九州の西海岸沿いを北上して小倉まで向かう。小倉から周防灘沿いに中津まで向かい、再び小倉に戻る。

長門国（あかまか関・神宮皇宮・まつ屋・麻町）→周防国（小川・山口・地ふく・つハ野）→石見国（あはら・益田・浜田・吉捕・湯之津・金山・大田八幡宮・はね）→出雲国（大社）→隠岐国（三崎大明神）→出雲国（真地・あたか・よなこ）→伯耆国（大山・角盤山大山・あか崎・立石・大塚・はし津・あお屋）→因幡国（鹿野・鳥取・八幡宮・平市・ハかさ町・狗山）→但馬国（なら尾・中瀬・やきの町・めり）→丹波国・丹後国（出石・ふちのもり・成相寺・きれと・御文殊・天の橋たて・九瀬戸・宮津・湯良・田鍋）→若狭国（松の尾・かんはし・野々村・ほら・上坂）

…本州最南端から瀬戸内海沿いに東進し、山口あたりから山陰道を通って北東に進み、やがて日本海側の益田に出る。そこから日本海沿いに進んで杵築（出雲）大社へ至る。隠岐島へ渡り、再び出雲から日本海沿いに東進する。鳥取から内陸部に入り、若桜街道を通り若狭湾に至る。舞鶴から南下し、都へと向かう。

山城国→都→鳥羽→大坂→天王寺→高野山→紀伊国→和泉国（松之尾）→河内国（太子）→大坂→都

…都を中心にして畿内を廻り紀伊国にまで足をのばし、再び都へ戻る。

近江国（大津・かひ津浜・森山・御多賀大明神・永浜・木之本・中河原）→越前国（今城・水落・北の庄・かな津）→加賀国（戸はた・那谷寺・大昌寺・小松・まつ戸・大山・竹ノ橋・久利賀良か峠）→越中国（いする木・森山・外やま・なめり河・三日市・黒辺四十八ヶ所の悪処・泊・さかひ）→飛騨国・信濃国・甲斐国→坊→越後国（親知らす子知らす・あふミ・のう・谷戸・府中・大場・国分寺・佐土島・上下・柏崎・小松・宮本・蔵王寮・猿沢・大はし・かも・林松）

…琵琶湖東岸を北上し越前国へ、日本海岸に沿って加賀。越中へと向かう。ここで、飛騨・信濃・甲斐に別れ、再び越後で合流している。途中佐渡島へも渡り、再び越後に戻り、日本海岸を北へと進む。

猶、越後国小松から出羽国龍石寺までのルートが不明確である。比定の候補地が複数あって断定が難しい地名があるからである。越後国の内陸部を通って出羽国へ向かったか、あるいは日本海岸を北上して出羽国に抜けたか、いずれかと思われる。

出羽国（龍石寺）→陸奥国（六十里・野沢・やけ山・矢沢・柳津虚空蔵・相津黒河・せなりあふり・ふくら・なかのま・白河・松島・平和泉・一の屏・二の屏・高館・白河・奈須之内あしの

…北上して出羽国まで向かい、陸奥国の一戸・二戸まで行き、南下して関東へ向かう。

猶、出羽国龍石寺・陸奥国六十里から野沢へ向かう途中のルートが不明である。総じて、越後・出羽・陸奥国のルートの一部は不明な点が多い。これは既述のように、複数のグループで廻国した後に、別のグループの廻国データを日限坊がまとめたためかもしれない。

下野国（日光山）→上野国（二ノ宮）→武蔵国（江戸）→黒羽ね・からすやま・千本→常陸国（堤・江戸さき・天徳寺・浜すり・鹿島大明神）→下総国（神取大明神・八日市場・さくら）→上総国（清住・八幡）→安房国（あなさき・ふん渡）→武蔵国（船橋・投はし・江戸・熊かへ町・鹿の川・兼沢）

…下野・上野＝武蔵・常陸＝下総＝上総・安房の順番で関東一帯を廻り、再び武蔵へと戻る。

猶、常陸国江戸さきを茨城県稲敷市、天徳寺を水戸市に比定すると、ルートが混乱する。あるいは、地名の順番を間違っているのかもしれない。また、黒羽ね以降伊豆国三島大明神まで移動距離が極端に長くなっている。それまでは概ね十里以下であったのが、五十里、六十里が何度もあり、多い時には七十四里というのも見られるようになる。恐らくこれは、既述したように、東国では「六町（約〇・六五キロ㍍）＝一里」が用いられていたからだと思われる。三島大明神の次ぎに駿河国ミまひはしに着いているが、ここに「是ハ京路一里也」とあり、これ以降の里数が急に小さくなる。つまり、ミまひはし以降、東国の「六町＝一里」から上方・西国の「三六町＝一里」に変わったということであろう。

相模国（鎌倉八幡宮・鶴か岡・ゆひの浜・はせ之観音・大仏殿・八口・藤沢・大いそ・虎か石・小田原）→伊豆国（箱ねの越・三島大明神）→駿河国（ミまひはし・原・神原・田子捕・江尻・府中・大炊川）→遠江国（懸川・ミつけ・浜松・龍禅寺・横すか）→三川国（吉田・一宮八幡・あか坂・岡崎・なるミ）→尾張国（熱田大明神・清巣・一宮・木尊河）→美濃国（儀府・南宮）→伊勢国（桑名・穴の津・やふ田・三ヶ敷太夫）→志摩国（金剛山浅間・大日寺・松坂・穴の津・関の地蔵）→伊賀国（上すけ・雨か瀧）→大和国（乗良・春日・乗良坂）→都→大坂

…相模国から伊豆＝駿河・遠江・三河＝尾張・伊勢＝志摩へと太平洋岸を西へと進み、伊賀・大和を経て大坂へ向かう。

四国・中国・淡路国→西ノ宮→須磨之捕→あつもりさまの腰懸の松→一之谷・三草の森・すゝめ野松原・ひよ鳥越・あつもりさまの御はか→播磨国（明石の捕・人丸之御はか・山口・野口・ひめ路・形島・さやの木の越し）→備前国（三ツ石・形かミ・岡山・吉備津大明神）→備中国（吉備津宮・河辺）→備後国（いはら・宮内・吉備津大明神）→安芸国（三ツ木・四日市・広島・かひ田・廿日市・西倉寺・宮島・尾形之町）→周防国（かしら野町・今市・野上・天神の宮・すへ）→長門国（山中・船木・うずひかた・神宮・関の戸）

…大坂を出た後、四国＝中国・淡路国へと三ルートに別れている。日限坊は摂津・播磨・備前＝備中・備後・安芸＝周防・長門の順に瀬戸内海沿いを西へと進んでいる。

豊前国（小倉・高良麓）→筑前国（秋月の内大熊・千斗原・八町坂＝あまき）→筑後国（はひ塚）→肥後国（大津山・山鹿之町・隈本・うと・八城関・日なこ・佐敷）→薩摩国（菱苅羽月）

…九州へ渡ると、豊前・筑前の内陸部（秋月街道）を通過して、筑後国の有明海沿いへと出ている。その後九州の西海岸沿いを南下し、薩摩

国まで戻っている。

奉納先寺社　四六の寺社に御経を奉納している。具体的な寺社名を記していない場合もあるので、実際に奉納した寺社の数はこれよりも更に多い。十四～十八世紀にかけての六十六部聖達が廻国納経した寺社名が明らかになっているが、これらに一致する寺社もあれば、そうでないものもある（二八頁表参照）。

各地の名所・旧跡・名物　日限坊一行は廻国の途中に各地で、名所や旧跡等を訪れている。その主なものを上げると、「鶴か岡・ゆひの浜・はせの観音・大仏殿」等の鎌倉の名所、「虎か石」、「腰掛の松・一之谷・三草の森・ひよ鳥越・あつもりさまの御墓」等源平合戦関連の名所、「人丸の御墓・すゝめ野松原」等がある。具体的な名称はないものの、他の地域でも名所や旧跡を見学している。

また名物としては、駿河国で食べた「うつのやの十おた子・せ戸のそめ飯」等がある。これらは現在でも静岡市と藤枝市の名物として販売され、人々に親しまれている。

同郷人との出会い　日限坊一行は廻国中、しばしば同郷人と出会っている。具体的には、肥後国山鹿宿で鹿児島衆久長与三、周防国山口で薩摩入来院之住僧、石見国浜田で薩摩衆、伯耆国青谷で大隅月情上人、常陸国天徳寺で薩摩衆に出会っている。久長与三と出会った時には、「きとくのしやハせ」「誠古郷の人なれ、不剰嬉敷思ひ更夜迄も語なり」と、素直に嬉しさを表現し、夜遅くまで語り合っている。山口で入来院の住僧と出会った時には「古郷床しき侭ニ色ゝ御会釈、其上引出物をたまわり名残お御したひ被成候」とあり、引き出物を貰い、名残惜しく別れた。浜田で薩摩衆と出会った時には、「たかひにすゝお持せ色々のひきて物を取替、一日のなくさミに候」とあり、お互いに酒を酌み交わし、色々の引き出物を取り替えた。天徳寺では薩摩衆と出合い、「種ゝ慰不及是非候」とある。

現代の旅行とは異なり、十六世紀末の廻国は非常に危険で、色々不便な事が多い旅であったと推測される。交通手段も時々船を利用する程度で、徒歩が基本であった。そのような旅の途中で、思いがけない同郷人との出会いは、廻国を続ける日限坊一行にとって素直に嬉しさがこみ上げてくる出来事であった。日記全体では、廻国した寺社や地名、距離、出来事等を短い文章で淡々と記しているのだが、同郷人との出会いの箇所は、純粋に喜んでいる文章が心に残る。

日記より少し時代が遡るが、天正三年（一五七五）の『中務大輔家久公御上京日記』[21]には、石見銀山で薩摩の人々と出会った記述が多く見られる。彼等は銀を石見から琉球まで運ぶ目的で石見にやって来ていた。[22]また時代は下るが、十九世紀の前半に廻国した野田泉光院は各地で彼の出身地である日向国佐土原の関係者に巡り会っている。[23]

十六世紀末以降、廻国が非常に流行し、諸国を巡る宗教者や参詣者達が日本各地に居た。現代人の感覚で考える以上に、前近代の人々にとって、宗教は重要で、廻国のエネルギー源に成り得たのである。

（三）

諸本の比較　現在までのところ、本史料に関しては以下に示すようにA本・B本・C本の三種類が確認できる。

【A本】個人蔵、黎明館保管

〔外題〕なし

〔内題〕なし

〔法量〕縦十七・一cm　横十二・五cm

文禄五年七月二九日、堀之内日限坊により書かれる。末尾に伊地知季通（当時・大口地頭代[21]）による奥書がある。これによれば、季通が新納久仰にA本を見せたところ、「裱褙」を加えて返却されたとある。A本を観察すると、摩滅や破れた部分に裏打ちが施され、全体が補修されていることがわかる。これが新納久仰による「裱褙」なのであろう。裏打ち紙の上に季通が文字や花押を書いていることから、補修の年は安政四年（一八五七）十二月よりも前ということになる。

【B本】個人蔵、黎明館保管

〔外題〕「于時文参甲午歳二月十一日打立也、廻国通道日記　堀内日限坊、堀之内日限坊」

〔内題〕なし

〔法量〕縦二三・〇cm　横十六・七cm

A本で判読が困難な文字をそのまま写したり、朱書きにより補筆や追筆等が認められることから、B本はA本を筆写したものと思われる。更にA本で紙が摩滅して判読不能な箇所もはっきりと記されているので、A本が現状のようになる前の段階で書写されたものと推測される。

猶、A・B本共に堀之内日限坊の子孫に相伝されている。

【C本】島津家本　東京大学史料編纂所蔵

〔外題〕「堀之内良限坊巡国通道日記　全（文禄自三年二月十一日至五年七月廿九日）」

〔内題①〕「（紙数弐拾四枚）于時文参甲午歳二月十一日打立、廻国通道日記　堀之内良限坊」

〔内題②〕「于時文参甲午歳二月十一日打立也、廻国通道日記　堀之内日限坊」

〔法量〕縦二七・三cm　横十九・二cm（東京大学史料編纂所ホームページ「所蔵史料目録データベース」による）

「公爵島津家編輯所」の罫紙に文字を記す。奥書によれば、大正十四年二月二～九日まで、堀之内直氏所蔵の原本一冊を竹崎武男が筆写。同年同月二七日、校正・校訂終了。副本名称に「堀之内良限坊巡国通道日記　文禄自三年二月十一日至五年七月廿九日」とある。

A本のみに見られる伊地知季通の追筆部分が無いこと、A本で判読が困難な文字を原文通り真似をして書かれていることなどから、C本はB本を書写したものと推測される。

随って、書写の順番はA本（文禄五年）→B本（A本を筆写）→A本摩滅→A本を新納久仰が閲覧、のち補修→A本に伊地知季通が奥書を加える（安政四年）→C本（B本を筆写、大正十四年）となる。

【註】

（1）「廻（回）国」には、単に「諸国をまわって歩くこと」の他に、「諸国の札所をまわって礼拝して歩くこと。また、その人」の意がある（『日本国語大辞典〔縮刷版〕第二巻』九五〇・九五一頁、小学館、一九七九年）。本日記の場合は後者に当たる。

（2）『西藩烈士干城録（一）』（鹿児島県史料集（49））。但し、本文中には「久規回国日記」とある。

（3）（鹿児島県史料集（13））。但し、本文中には「久規廻国通道日記」とある。

（4）『鹿児島県史料旧記雑録拾遺伊地知季安著作史料集八』所収。

(5)『島津氏正統系図』。

(6) 六十六部聖として諸国を廻った井尻神力坊の場合は、同行者が百余人いたという史料がある。拙稿「伊尻神力坊について―ある六十六部聖の生涯―」(『黎明館調査研究報告』第十七集、二〇〇四年)参照。

(7)『牧園町郷土誌』一九八一年。猶、『旧記雑録』にも同内容の「平山氏系図」が収録されている(『鹿児島県史料旧記雑録後編二』一二一八号)。

(8)『御家伝并諸家由緒』六五号(『鹿児島県史料旧記雑録拾遺記録所史料二』所収)。

(9) 亀石光夫「堀之内家系図」(『南九州郷土研究』第十一号、一九七〇年)。

(10) 日向国佐土原の山伏野田泉光院が鹿児島から秋田までを廻国したのは、文化九年(一八一二)九月から文政元年(一八一八)十一月にかけての六年二ヶ月間であった。彼に同行したのは合力の平四郎ただ一人だけであった(石川英輔『大江戸泉光院旅日記』講談社、一九九七年)。このことと比較してみても、一年五ヶ月でも二年五ヶ月であっても、日限坊の廻国の期間がいかに短かったかが窺い知れよう。既述したように、相当数の人数で廻国し、それぞれが地域を分担して、持ち帰った道中メモを最終的に日限坊が取りまとめた可能性があると思われる。

(11) 大口市郷土誌編さん委員会編『大口市郷土誌上巻』三一八・三一九頁、大口市、一九八一年。

(12) 前掲亀石「堀之内家系図」。

(13)『薩藩名勝志(その一)』(鹿児島県史料集(42))。

(14) 塚の大きさが十間(約十八㍍)四方であったというのは理解できるが、三十三尋(約五九・四㍍)の塔婆というのは何等かの誤りか。

(15) 前掲平山忠高願書。『本藩人物誌』にも塚の規模と現在でも験があることが記される。

(16)『日本国語大辞典(縮刷版)第九巻』二四七頁、小学館、一九八一年)。

(17) 同右二四六頁。

(18)『日本国語大辞典(縮刷版)第十巻』一〇一五頁、小学館、一九八一年。

(19) 但し、陸路を取った場合、当時九州の北部と南部を結ぶ交通上の難所とされた赤松太郎峠(標高一三八㍍)と佐敷太郎峠(標高三一四㍍)を越えねばならず(『角川日本地名大辞典43・熊本県』五三〇頁、角川書店、一九八七年)、相当の困難があったと思われる。

(20) 勿論、日記に出てくる地名が、現在のどの場所に当たるのかという厳密な比定は困難である。また、地図上での距離の計測であるので、誤差が生じるのはやむを得ない。従って、ここで一歩=約三~四キロ㍍前後と書いたが、このような誤差が生じていることを踏まえた上で出した数字である。

(21) 村井祐樹「東京大学史料編纂所所蔵『中務大輔家久公御上京日記』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第十六号、二〇〇六年)。

(22) 榎原雅治「〈黎明館講演会〉演題『島津家久公上洛の旅』」(『黎明館調査研究報告』第二四集、二〇一一年)。

(23) 前掲石川『大江戸泉光院旅日記』。

(24) 前掲『大口市郷土誌上巻』三五一頁。